神戸女学院大学論集　第63巻第1号　Kobe College Studies Vol. 63 No. 1 (June 2016)

E. タレー書簡に見るトニック・ソルファと音楽教育

津　上　智　実

Tonic Sol-Fa and Music Education in Elizabeth Torrey's Letters (1890-1909)

TSUGAMI Motomi

神戸女学院大学 音楽学部 音楽学科 教授
連絡先：津上智実　〒662-8505　西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学音楽学部音楽学科
ZAT03327@nifty.com

要　旨

本稿はアメリカン・ボード宣教師文書の内、音楽教師エリザベス・タレー Elizabeth Torrey（1848～1921、常勤在任1896～1909）の書簡を解読することによって、当時の音楽教育の一端を明らかにすることを目的とする。

タレーは1890年に来日し、始め新潟、次に大阪の梅花女学校で教えた後、1894年から非常勤講師、1896年からは常勤講師として神戸女学院で音楽教師を務め、1906年に音楽科を創設したことで知られる。タレーがアメリカン・ボードに書き送った書簡は在日20年間に21通と少ないが、そこにはタレーが熱心に取り組んでいたトニック・ソルファ教育に関わる記述が含まれている。すなわち書簡の記述から、タレーは1892年に四国今治の教会での６週間の「短期コース」でトニック・ソルファ教授法を習得し、掛図の作成を行なったこと、梅花女学校で徹底した指導を行なって（批判もあったものの）成果を上げていたこと、1898年と1902年の２回、トニック・ソルファ版の『教会讃美歌集 *Church Praise Book*』（ビッグロウ＆メイン社、初版 1881）を100部ずつ出版社と教会の協力を得てアメリカから取り寄せて神戸女学院の学生の教材としたことが浮かび上がってきた。

さらに本学図書館にはこのトニック・ソルファ版『教会讃美歌集』（ビッグロウ＆メイン社、1888）が１冊現存し、そこには「Walter Cary, Kyoto, from Miss Torrey, Sept. 15. 1894」という書込みが残されていることも判明した。このように明治期の神戸女学院の音楽教育においては、トニック・ソルファの掛図とトニック・ソルファ版『教会讃美歌集』が大きな役割を果たしていたことがこれらの書簡から明らかになった。

キーワード：E. タレー、トニック・ソルファ、宣教師文書、音楽教育

Summary

This paper aims to survey the music education of Kobe College in the Meiji Era, through reading of twenty-one letters by Elizabeth Torrey (1848-1921, music teacher of Kobe College in 1896-1909), sent to the American Board from 1890 to 1909. Elizabeth Torrey arrived to Japan in 1890, and after staying in Niigata and teaching at Baikwa Girls' School in Osaka, she taught music in Kobe College at first as part time teacher from 1894, and then as permanent teacher from 1896 to 1909.

The main interest of her letters concerns the Tonic Sol-fa Method, which she used enthusiastically and systematically in her music education. One of her letters tells us that she learned this method in 1892 when she visited Imabari, Ehime Prefecture, in Shikoku Island, at the invitation of a church (possibly the Imabari Church founded in 1879). In 1898 and 1902, she asked the American publisher, Biglow & Main, to arrange to send a hundred copies of *Church Praise Book* in the Tonic Sol-fa edition, first published in 1881, for the use of Kobe College students. The publisher was so kind to donate the books to the School.

My research this time has made it clear that the Kobe College Library possesses a copy of this *Church Praise Book* in the Tonic Sol-fa edition of 1888, and this book has an inscription, 'Walter Cary, Kyoto, from Miss Torrey, Sept. 15. 1894,' seemingly written with her own hand.

Thus the reading of Torrey's letters leads us to the understanding that this *Church Praise Book* of Biglow & Main was the main teaching material in her Tonic Sol-fa education, with Tonic Sol-fa wall charts, which have been also kept in the Kobe College Library.

Keywords: Elizabeth Torrey, Tonic Sol-fa, Missionary Letters, Music Education

0）はじめに

本稿はアメリカン・ボード宣教師文書の内、音楽教師エリザベス・タレー Elizabeth Torrey（1848～1921、常勤在任1896～1909）の書簡を解読することによって、当時の音楽教育の一端を明らかにすることを目的とする。中でもタレーが熱心に取り組んでいたトニック・ソルファ教育に関わる記述が注目される。関連資料が本学図書館に現存することを今回新たに見出したので、その報告も行なう。

1）エリザベス・タレーとその書簡

エリザベス・タレーは本学音楽科を創始した人物として位置づけられている。『神戸女学院百年史』によれば、「音楽にはスタンフォード夫人に続いて明治27年タレー女史が来任し、在日15年の間に音楽科を創設し、今日の音楽学部の基礎を確立した」[1] とされる。この内、「明治27年タレー女史が来任し」は非常勤講師としての着任であり、常勤に着任したのはその2年後、明治29（1896）年のことである。また「在日15年」とあるが、タレーの来日は1890年から1909年までであるので、正しくは「在日20年」もしくは「在任15年」である。

アメリカン・ボード宣教師文書に含まれるタレー書簡は、1890年から1909年までの20年間でわずか21通と少ない（次頁の表1「タレー書簡一覧」参照）。日本に赴任した1890年に4通、1892年1通、1893年1通、1895年1通、1897年2通、1898年4通、1899年2通、1900年3通、1902年1通、1906年1通、離日した1909年に1通が書かれているが、その他の9年間（1891、1894、1896、1901、1903、1904、1905、1907、1908年）については1通も書かれていない。

タレー自身、自分がなかなか手紙を書かないことについて批判があると記しており[2]、書簡の少なさが問題視されていたようである。

タレー書簡は、解読に当たっての困難が多い。その原因に（1）悪筆、（2）悪文、（3）筆記具の問題の3つが挙げられる。

まず（1）筆跡がC. B. デフォレスト書簡[3]のように美しくなく、癖があって読みにくい。明らかに清書したと見られる書簡は丁寧に書かれていて問題が少ないが、下書きなしで直接書いた書簡と見られるものは非常に読みにくい。

次に（2）文法的におかしい文章や、話題が散漫に飛んで前後の繋がりがよく分からない文章が散見されるため、文章の流れから判読困難な語を推測するという手続きがうまく機能しない。

1）神戸女学院百年史編集委員会編『神戸女学院百年史（総説）』（神戸女学院、1976）130頁。

2）1898年10月21日付書簡（タレー書簡 No. 12：No. 164）に次の記述がある。"I do not know but even as I write there is an official rebuke on the way to me, because I have not in any way reported myself to you, or to Mr. Wiggin, when I left Kobe July 13th."

3）津上智実編『C. B. デフォレスト書簡の解読（Ⅰ）1905～1919、アメリカン・ボード宣教師文書より』（神戸女学院大学「宣教師文書」研究会、2016）参照。

表1：タレー書簡一覧

【ABC. 16.4.1. vol. 25】【Unit 3, Reel: 363】 MF-51-38: 153-167（Film Nos. 378-429）（15通）

v. 25. Mission to Japan, 1890-1899. v. 13. Ste-W

① No. 153: 916 Holmes, Kansas City, Mo. 1890-8-22; Dr. N. G. Clark

② No. 154: 916 Holmes, Kansas City, 1890-8-25; Dr. Clark

③ No. 155: s.l., 1890-11-9; Dear Friends

④ No. 156: Niigata, Japan, 1890-12-26; Dr. N. G. Clark

⑤ No. 157: Imabari, 1892-8-27; Dr. Clark

⑥ No. 158: Osaka, 1893-4-6; Dr. Clark

⑦ No. 159: 31 Osaka, 1895-5-28; Dr. Barton

⑧ No. 160: Kobe College, Kobe, 1897-1-23; Dr. Barton

⑨ No. 161: Kobe, 1897-7-7; Dr. Barton

⑩ No. 162: Kobe College, 1898-5-2; Dr. Barton

⑪ No. 163: Kobe College, 1898-5-4; Dr. Barton

⑫ No. 164: 766 Fairmount St. Cleveland O.; 1898-10-21; Dr. Barton

⑬ No. 165: s.l., 1898-12-27/28; Dr. Barton

⑭ No. 166: The Sanitarium Company, Clifton Springs, N. Y., 1899-5-2; Dr. Barton

⑮ No. 167: ℅ Mrs. Thos. Reese, Clayton, N. Y. 1899-8-19; Dr. Barton

【ABC. 16.4.1. vol. 34】【Unit 3, Reel: 372】 MF-51-47: 150-155（Film No. 364-373）（6通）

v. 34, Japan Mission, 1900-1909, Vol. 9, S-W

⑯ No. 150: 766 Fairmount St. Cleveland O.; 1900-8-1; Dr. Barton

⑰ No. 151: 766 Fairmount St. Cleveland O.; 1900-8-8; Dr. Barton

⑱ No. 152: 766 Fairmount St. Cleveland O.; 1900-8-28; Dr. Barton

⑲ No. 153: Kobe College, Kobe, Japan, 1902-4-12; Dr. Barton

⑳ No. 154: Kobe College, 1906-9-11; Dr. Barton

㉑ No. 155: Kobe College, 1909-2-20; Dr. Barton

また（3）和紙の巻紙に長々と書かれた書簡や、用紙の端までびっしり書かれているために製本時に綴じ込まれて読めない部分がある書簡など、物理的に解読を困難にする問題を抱えている。

こうした問題があるため、タレー書簡全体の解読は完了に至っていない状態であるが、音楽関係の記述箇所については解読を終えることができたので、本論ではそれらの部分を扱うこととする。

2）トニック・ソルファ教育法の習得

トニック・ソルファ（Tonic Sol-fa）は、19世紀半ばに英国で発明された簡易譜による視唱の指導法[4)]で、明治期の日本でも横浜のフェリス女学校や神戸女学院などミッション・スクールを中心に活用された。本学ではタレーが熱心に指導を行ない、教材の掛図が残っていること

4) *Grove Music Online* の 'Tonic Sol-fa' の項には「19世紀半ばにサラー・アンナ・グラヴァー Sarah Anna Glover［1786～1867］によって発明され、ジョン・カーウェン John Curwen［1816～1880］とジョン・スペンサー・カーウェン John Spencer Curwen［1847～1916］とによって広範に普及された記譜の形式と視唱のシステム」とある（2014年12月24日アクセス）。

については別稿[5]で指摘した通りである。

さて、タレー書簡 No. 5（1892年８月27日付、今治発信、クラーク宛；ABC. 16.4.1. v. 25, No. 157）はタレーがトニック・ソルファ教授法を習得した経緯を記していて興味深い。この書簡は愛媛県の今治で書かれ、次のように記されている。

> 私は教会の招きでここ［今治］に来て６週間になりますが、８人のクラスに入って、トニック・ソルファ教授法の「短期コース」を修了しました。彼ら［この８人］は視唱したり、聴き取って記譜したり、世界中のどんな讃美歌や歌でも歌うことができるようになって、しかも確信をもってできるようになったので、今度は他の人々に教えたくなって、その目的のためにモデュレーターの掛図を作りつつあります。
>
> I've been here at the invitation of the church[,] here I am six weeks, I have graduated a class of eight people in the "Short Course" in Music with the Tonic Solfa Method. They can sing at sight, or write from dictation and then sing the air of any common hymn tune or song in the world and they have been so through that they are anxious to teach others and are making Wall Modulators for that purpose.

この「短期コース」の講習会が誰の指導によるものであったのかは、記述がないので現状では不明であるが、四国での開催であること、またタレーが「教会*の招き」によると記しているのを考え合わせると、大阪を拠点として広く活躍していたアメリカン・ボード宣教師のジョージ・オルチン George Allchin（1852～1935）であった可能性が高いと考えられる。オルチンは1882年の来日以来、大阪の教会や梅花女学校を中心に歌唱指導の実績を積んで、トニック・ソルファ指導法の日本での有効性を1889（明治22）年９月20日のフェリス和英女学校（現在のフェリス女学院）での講演で主張するなど、日本におけるトニック・ソルファ教育の強力な推進者であった。

一方、タレー書簡 No. 7（1895年５月28日付、大阪発信、バートン宛；ABC. 16.4.1. v. 25, No. 159）によれば、タレーは「1891年９月に宣教師団の求めに応じて音楽を担当するために［梅花女学校に］来た（I came in September '91 at request of the mission, to have charge of the music.）」のであるから、梅花女学校で早くから歌唱指導をしていたオルチンとは職場で出会っていることになる。

当時の日本では、1890年に横浜でエミリー・パットン Emily Sophia Patton（1831～1912）によってトニック・ソルファ法の講習が開始されて、公式の資格取得者が生まれつつあったことが知られている[6]。ここで資格を得た鈴木米次郎（1868～1940）によって教本の邦訳も行なわ

5）津上智実「トニック・ソルファの掛図」（「図書館の宝物から」シリーズ第３回）神戸女学院史料室『学院史料』第28号（2015年３月）46～56頁、同「トニック・ソルファの掛図と教本に見る明治期の音楽教育」神戸女学院大学研究所『神戸女学院大学論集』第62巻第１号（2015）115～129頁。

＊ 1879（明治12）年設立の今治教会と思われる。

6）武石みどり『音楽教育の礎、鈴木米次郎と東洋音楽学校』（春秋社、2007）46～48頁。

れ、講習会も開催されるようになった時期であり、タレーが参加した講習会もこうした流れに沿うものであったと考えられる。

3）教材の手配

さらに興味深いことに、タレー書簡 No. 10（1898年5月2日付、神戸女学院発信、バートン宛；ABC. 16.4.1. v. 25, No. 162）は、トニック・ソルファの教材の手配がどのように行なわれたかを伝えている。ここでタレーは「トニック・ソルファ教授法が初心者に最も適した音楽の教授法」であり、「声域の狭い人々にとりわけよく適った方法」であること、それは「調を簡単に下げることができるから」であると説明した上で、「これらの［神戸女学院の］少女たちは英語の讃美歌を歌うのを好むが、一冊を例外として、すべての讃美歌集は五線譜で記譜されているため、少女の十人中九人にはまったく役に立たない。そこでこれらの讃美歌集にトニック・ソルファ法で書かれたものを挟み込むことを考えたが、しかしこのプランはうまく機能しなかった」と記している。その上でタレーは次のような提案を行なっている。

> トニック・ソルファ版『教会讃美歌集』の出版社であるビッグロウ＆メイン社に頼んで、この讃美歌集のトニック・ソルファ版を購入した教会の住所を教えてもらい、その中の教会に手紙を書くことで、教会で不要となったトニック・ソルファ版『教会讃美歌集』を神戸女学院に回してもらうことができないだろうか。というのも自分が所属していた教会でも、3組の讃美歌集が備えられていたが、まったく使われずに反古紙扱いであったので、そのように打ち捨てられている讃美歌集が25部なり50部なりあれば、我々［神戸女学院の教員と生徒たち］にとってはありがたい恵みになる。トニック・ソルファ法はアメリカではそれほどポピュラーではなく、しばしば新しい讃美歌集が買い入れられているのであるから、たとえ10部であっても我々にとっては大きな助けになる。

> You know the Tonic Solfa Method of teaching music, is the one best fitted for beginners, simplest and for people with voices of narrow compass particularly well adapted, as the key can be lowered so easily (Transposition is nothing to the Tonic Solfaist, you know, whereas people think only musicians can transpose in the Staff notation). These girls like to sing English hymns, our book, and all hymn books but one, are in Staff Notation, so the music, the notes are of no use to nine tenths of our girls. I have tho[ugh]t of interleaving these hymn books with the times written in T. S. F [= Tonic Sol-Fa], but the plan does not work.
>
> Might not a better to Biglow & Main, publishers of a T. S. F. ed. [= edition] of "The Church Praise Book," bring word addresses of Churches who have bought T. S. F editions of the book and might not letters to some church result in Kobe College having its discarded T. S. F. Church Praise Books.
>
> My own Church had at one time three sets of books lying around, of no value but for waste paper — 25 to 50 copies of such discarded books, (T. S. F. edition) would be a bonanza to us —

T. S. F. is not very popular in America — new hymn books are often bought — even 10 books would be a great help to us.

I havn't the money to pay Biglow & Main 50 ¢ gold for new books, in the while, and have them found cheaply out here — I've tho[ugh]t much of this plan — there are plenty of English Hymn books in T. S. F. but they aren't like the American books — and would cost money beside. If the books could be given, or nearly so, I could and would pay the expense of getting them out here.

Now if you can get some one to attend to this, and save yourself, the trouble, please do; if not, can you attend to it and put me under obligation to you again?

How shall I pay my debts to you tho[ugh].

If you think the plan chimerical and unworkable, throw this in the waste basket, and never mind ever answering. If it succeeds, I'll get the bill and the books sometime.

I've no time to write about anything tonight. Commencement music has pressed me hard for three weeks, but it's close now, not too high nor too hard, I hope now comes the work of drilling the girls till they can sing it.

文面から窺われるように、これは予算がないための苦肉の策であったようである。しかしこの提案は功を奏した様子で、タレー書簡 No. 12（1898年10月21日、オハイオ州クリーヴランド、フェアモント通766番地発信、バートン宛；ABC. 16.4.1. v. 25, No. 164）では、「ビッグロウ&メイン社からのトニック・ソルファ本については、学校に本を寄贈してくれるとは何と親切なことでしょう[7]」と謝意を表している。

このように出版社を通じて教会から不要となったトニック・ソルファ版『教会讃美歌集』100部の提供を受けたのであるが、実はこのような教材の調達方法は1回で終わったのではなく、4年後にも再度行なわれていることが知られる。その経緯を伝えるのが、タレー書簡 No. 19（1902年4月12日付書簡、神戸女学院発信、バートン宛；ABC. 16.4.1. v. 34, No. 153）である。ここでタレーは「トニック・ソルファ譜による教会讃美歌集がさらに100冊必要」と書き送っている。ここには「190人の生徒がいるが、五線譜を読めるのは10人にも満たないのに対して、150人はトニック・ソルファ譜を読んで理解する[8]」と記されており、1902年当時の神戸女学院生にとっても五線譜はまだまだ理解の及ばないものであり、トニック・ソルファ法の方がはるかに身近であったことが分かる。

7) "About those Tonic Sol-fa books from Biglow & Main, How kind of them to give them to the School. I wrote my letter of thanks to them and then, remembering your suggestion that I write something which they could publish ab[ou]t how the system worked in Japan. I did not send it till I could write the something."

8) I have been in adequate minds about writing to you, yet the need is four times as great as in 1898 when I wrote before.／ *The Church Praise Book* in T. S. F., Biglow & Main, I have a few. I need 100 more.／ Would it be possible to find some, which had been discarded by some church? Churches are always changing. There isn't any $ 100, yet 190 girls w'd read the hymns, not ten of them can read from Staff notation, while 150 read & understand Tonic Sol-fa. I don't know any cheaper hymn book in T. S. F. Will you think of the matter and act if you can?

4）現存資料の存在

このようにしてタレーの発案と出版社の尽力、そして諸教会からの現物提供という協力を得て、100部もの讃美歌集が女学院に送られた。1898年に100部、また1902年にも100部が送られてきたのであれば、この讃美歌集が１冊や２冊残っていてもおかしくない。そう考えて大学図書館のOPACで検索したところ、次の１件がヒットした。図書館本館に「準貴重書」として配架されている１冊である。トニック・ソルファ版『教会讃美歌集』は初版が1881年で、その後、1882年と1887年に再版されているので、本学所蔵のこの１冊はこれに続く再版と見ることができる。

The church praise book: a selection of hymns and tunes for Christian worship, Biglow & Main, 1888.
神戸女学院大学図書館本館、準貴重書、請求番号783.9/ST1、登録番号 0031286

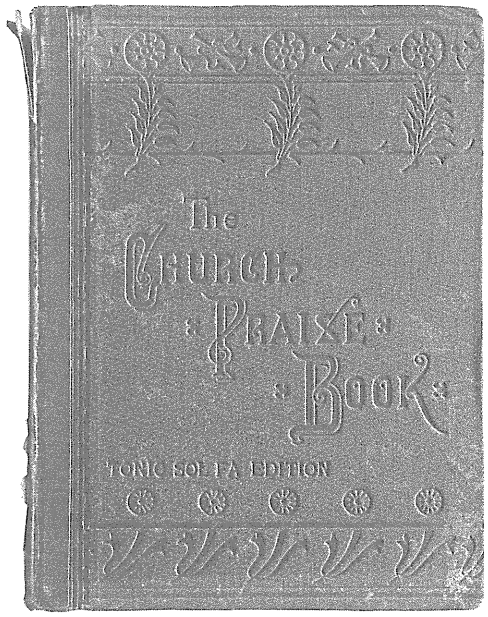

写真１　表紙

さっそくカメラ持参で閲覧に出向いたところ、予想通りこの讃美歌集にはタレーの名前が記されていた（写真１、写真２）。写真２を見ると分かるように、この讃美歌集の表紙裏の遊び紙には「Walter Cary, Kyoto, from Miss Torrey, Sept. 15. 1894」と記されている。表記の点では疑義が残るものの筆跡からするとタレー自身の手になるものと推測される。サインの日付が1894年であるので、この１冊は上記のビッグロウ＆メイン社からの寄贈に先立つものである。すなわちこれは、すでに1894年にはタレーが用いていた讃美歌集であることが明らかで、これを1898年と1902年の２回、生徒たちのために100部というまとまった部数が必要であるとしてアメリカに協力を求めたものと理解される。

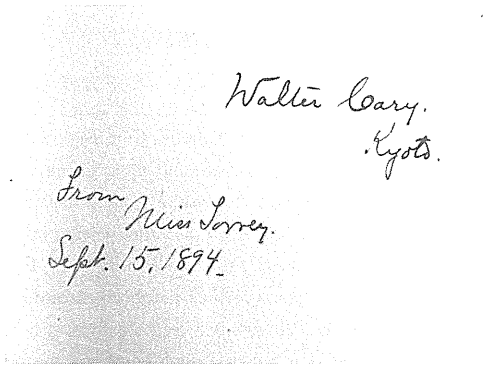

写真２　表紙裏の遊び紙のサイン

なお、この讃美歌集を贈られた相手のウォルター・ケーリ（生没年不詳）は、オーティス・ケーリ博士（Rev. Otis Cary, D. D.）の次男と考えられる。ケーリ博士は1878年から1918年まで日本で活動したアメリカン・ボードの宣教師で、同志社神学部で長年教鞭をとり、神戸女学院理事も務めた人物である。博

士には４人の子どもがあり、三男のフランク（Frank）と長女のアリス（Alice）は共にアメリカン・ボードの宣教師となり、長男ジョージ（George）と次男ウォルター（Walter）はアメリカで牧師と医者（どちらがどちらかは不明）をしたことが知られているという[9]。

このように今回の書簡解読との関連で、図書館の現存資料の存在が確認できたのは一つの成果であり、今後、この讃美歌集の内容[10]を検討することによって、1900年前後の本学の音楽教育の実態を解明するための具体的な手掛かりが得られたことになる。

５）当時の音楽理解とタレーの指導法

タレー書簡 No. 7（1895年５月28日付、大阪発信；ABC. 16.4.1. v. 25, No. 159）は、当時の日本の音楽理解の有様を論じている。ここでタレーは「日本人の間には音楽に対する一般の感性がない。聴く耳がなく、オルガンはほとんどどこの家庭にもない、オルガンを持ちたいと思う人すらほとんどいない」と嘆いている。1895年と言えば、タレーは大阪の梅花女学校の音楽教師を務める傍ら、前年の1894年から神戸女学院にも非常勤講師として週２日教えに来ていた時期に当たる。

従って、ここでの記述の多くは梅花女学校に関するものではあるが、タレーがどのような指導法を用いていたか、その片鱗を窺わせるものがあって興味深い。ここでタレーは、基礎を徹底的に叩き込むこと、そのために文字通り根本から鍛え上げるが故に、１年目は第１段階のみを歌わせたが、今年は10人のみが第２段階で、その他は全員第３段階まで進み、第１段階に留まっている生徒は一人もいないと説明している。ここで第１段階とは、主和音のドミソ、第２段階は属和音のソシレ、第３段階は下属和音のファラドを意味している。

> I saw there was no public sentiment about music, among the Japanese, there was no ear, organs were rare in homes, few could ever hope to own one; to sing "Sambika" tunes, and to play them and a march or tow, was the ideal musical education, hence I tho't, "our grounding in fundamentals must be complete and exact and as far as we go we must be thoro[ugh]". I worked on those lines, thou[gh] very few of those who had had any previous training submitted to my drill.
>
> For these years there has been a rule (tho[ugh] largely a dead letter!) "All pupils must go to Singing Class" but there has been irritation every commencement, because I would not "show off" girls who had never been in my classes. My promise, which I have never broken, was "anything my classes can sing, I will get up for Commencement or any time you wish". I have worked up from the bottom, literally, for the first year we could only sing in the "First Step", (I hope you are familiar with the Tonic Solfa method, I found that in use here), this year I have had a class of ten, who voluntarily met after school to sing two part songs at sight. When I stopped in March, I had 46 girls in my classes, all but 10 in the 3rd Step, those 10 in the 2nd Step and no First Step. All were

9) 神戸女学院史料室の佐伯裕加恵氏からの情報による。

10) このトニック・ソルファ版『教会讃美歌集』については、下記サイトで内容を閲覧することができる。https://archive.org/stream/praisebook00stry#page/n399/mode/2up

working well, many very well, indeed.

1896年に神戸女学院の常勤教員となってから書いた最初の書簡は、タレー書簡 No. 8（1897年1月23日付、神戸女学院発信；ABC. 16.4.1. v. 25, No. 160）であり、ここでは大阪（すなわちこの場合は梅花女学校）からの申し出について書かれているが、そこで日本人の歌唱を聞いたことがなければ、ここで日本人が「非常に悪い歌唱だ」と言っているのがどの程度のものかは分からないだろうと述べていて、当時の歌唱の実態を察することができる。

> I received last week from him a very cordial invitation to "come up to Osaka, any afternoon I pleased and teach music, six organ pupils and three or four singing classes were anxious to be taught. There had been no teaching last term and the singing was getting very bad."／ By the way did you hear any Japanese singing? If so, you may hardly be able to imagine what a Japanese calls "very bad."

またこの書簡の続きでは、タレーが神戸女学院の生徒の一人に対して、自分の先唱に従ってドの和音（ドミソミド）を歌えるようになるまでは、あらゆる歌のクラスから外すという徹底した遣り方をしていたことが語られている。そうすることによって、他の生徒達の取り組みを高める効果が期待されているのであるが、このような遣り方がトラブルを生むかもしれないという危惧の念も同時に表明されている[11)]。

> When a girl is excused from all her classes until she can sing the Doh Chord, d m s m d, after her teacher, in the Singing class, a public sentiment soon grows, that it is wise to obey the singing teacher, I think my position with the girls grows more secure each month as they know more their reason is forced to approve my methods or the system I use. Still no one is sure of a Japanese. Trouble may come tomorrow.

さらにタレーは日本における音楽教育のむずかしさについて、「これらの［神戸女学院の］少女たちに讃美歌の曲を［オルガンで］よくとは言わないまでもまずまずの出来で弾けるようになるまで教えるのは非常にむずかしい仕事である。もしそれが出来たら、この学校の現状の体制の中で私は成功を収めたことになるが、変化が訪れるかもしれない［後略］」と述べている。

> It is a very difficult thing to teach these girls to play hymn tunes, respectably, I do not say well. If it

11）事実、前年の1895年には梅花女学校でタレーの厳しい指導法が物議を醸して、タレーが一旦辞表を提出するといった事件があったが、これについては安田寛「神戸女学院の音楽教育 ― アメリカン・ボード日本ミッション音楽教育史 その4―」『キリスト教社会問題研究』第51号（2002）189～212頁に記述があるので割愛する。

can be done I shall succeed, under the present management of this School, but changes may come. I leave that to the Lord. I know He can find work for me, when it is not best for me to teach Music here any longer.

また、タレー書簡 No. 11（1898年５月４日付；ABC. 16.4.1. v. 25, No. 163）では、タレーが鍛えた日本人生徒２名に、年少でほとんどが初心者の生徒たちの指導をさせるという提案がなされている[12]。これは今日のティーチング・アシスタントの走りと見ることができるだろう。

６）まとめ

アメリカン・ボード宣教師文書に含まれるエリザベス・タレー書簡21通の解読を通じて、トニック・ソルファ法に関する情報を多面的に得ることができた。すなわち、タレーは1892年に四国今治での６週間の短期コースを修了することによって、トニック・ソルファ法の指導法を身に付けると共に、モデュレーターの掛図を作成している。1895年には梅花女学校の生徒たちをみっちりと仕込んでいたその様子が具体的に記されており、１年目は第１段階（すなわち主和音のドミソ）のみに終始し、２年目でようやく第２段階（属和音のソシレ）から第３段階（下属和音のファラド）に進むという指導法を採っていたことが知られる。

1896年に神戸女学院に移った後、1898年と1902年にはトニック・ソルファ版の『教会讃美歌集』を100部ずつ調達しており、これが主たる教材であったことが分かる。このトニック・ソルファ版『教会讃美歌集』は、１冊のみではあるが、本学図書館に今も現存しており、そこにはタレー自身のものと思われる手で「ミス・タレー、1894年９月15日」との書込みがなされている。これは丁度タレーが神戸女学院に非常勤講師として教えに来るようになった時期である。当時の日本は、西洋楽器はもちろん、西洋音階やその記譜法である五線譜にも馴染みがなく、読ませるのも歌わせるのも非常に困難で、指導に苦労していた様子がよく伝わってくる。特に声域が狭くて、高音で歌うのが苦手だった当時の日本人にとって、移調が簡単なトニック・ソルファ法は適していたのである。

タレーがどれほど熱心にトニック・ソルファ法の指導を行なっていたかは、『めぐみ』誌に掲載された卒業生向けのタレーの書簡から窺うことができる。ここでタレーは、讃美歌483番「わが主イエスよ、ひたすら More Love To Thee, O Christ」の実例を示して、トニック・ソルファ法の基本と利点を具体的に卒業生たちに向けて力説している[13]。

さらに後年、タレーが没した後に、卒業生の柳田（安福）ちゑ（M24回）は生前のタレーの指導法について次のように回想している。

さて、先生が生徒をして真に音楽を了解せしめん為に初歩として用いられしは、タニクソ

12）The tho[ugh]t is, no new purpose will be taken and two Jap. Girls whom I have trained can keep on with the present pupils who are young, and mostly beginners.

13）神戸女学院『めぐみ』第25号（1900年12月発行）18～20頁。

フワー式でありました。その式は一見簡単ですが、何分理論に富む事とて、先生には生徒をして容易に覚えしめん為、特殊なる方法を用いられ、例えば音楽を教えるにしても、最初より七音を用いられず、ドミソの三音を以って其の音程を明らかにする為掛図を用いられたり、手を上下にされたり、又は文字に高低を附けて生徒を階名で答えしめられました。右の三音を明白に覚えしめた後、関係ある音を順次に教えられ、決して先生は一時に多くの事を教えられず、One thing at a time を繰り返し繰り返し申されました[14)]。

かくしてタレーは、1892年に今治での講習の後、梅花女学校においても神戸女学院においても熱心にトニック・ソルファ法による音楽教育に取り組み、そのための教材として掛図を手作りすると共に、生徒たちの教材としてトニック・ソルファ版の『教会讃美歌集』を尽力してアメリカから多数取り寄せたのであった。今日神戸女学院に残るこの１冊のトニック・ソルファ版『教会讃美歌集』は、19本のトニック・ソルファの掛図と共に、当時の音楽教育の実態を今日に伝える貴重な資料群を成しているのである。

なお、本稿は神戸女学院大学研究所2015年度「総合研究助成」による「宣教師文書の解読と解明～デフォレスト文書を中心に～」（研究代表者：津上智実、研究分担者：飯謙、田辺希久子）の研究成果の一端を成していることを記して感謝する。

（原稿受理日　2016年２月21日）

14）柳田ちゑ「恩師タレー先生のお働きに就て」神戸女学院『めぐみ』２号（大正11年８月）７～８頁。